

第3回

日本ミルトン協会研究大会

2010年10月23日（土）
フェリス女学院大学緑園キャンパス
7号館201教室
（雨天の場合は203教室）

研究発表要旨

シンポジウム要旨

「ミルトンの言葉（で）」

研究発表①

セイタンの味方か否か—『失樂園』における混沌の描写をめぐって

江藤あさじ

『失樂園』に登場する「混沌」はセイタンの味方か否か。そのような質問を投げかけたくなるほど、混沌の描かれ方は両義的である。『失樂園』では、天国と樂園は光の地、混沌と地獄は闇の地として描かれている。混沌の世界は「混沌」と「夜」と「偶然」に統治されており、原子が絶えず繰り返す争いで混乱に満ちている。闇の世界に落とされたセイタンは、光の世界を目指す途中、そのような混乱の世界に突入するのだ。初めて混沌の世界を目の当たりにしたセイタンは、その様子から、混沌は神と対立する存在であるとみなす。続くセイタンと「混沌」との間で繰り返される会話は、「混沌」によって発せられる解釈の難解な箇所があるものの、読者に光の世界と闇の世界の対立を一層強く印象づけることになる。

ミルトンは、『失樂園』においても、『キリスト教教義論』においても、物質を悪とみなす二元論的解釈に異議を唱えてきた。それなのに、ここでのミルトンは、グノーシス主義さながらの二元論的世界を故意に描いているように思われるのである。それは何故なのか。ひとつはセイタンを錯覚させるため、そしてそれと同時に読者を錯覚させるためであろう。これは、後にそれが錯覚であるということが分かった時に、一層ミルトンが言わんとすること、すなわち、グノーシス主義的な二元論の世界は存在せず、混沌は決してセイタンの味方ではない、ということを確認する効果があると考えられる。そしてもうひとつは、人間の自由意思に関するミルトンの思いを描き出すためではないかと推察される。勿論それは、物質と精神を切り離さないという神学的なレベルの話にもなるのだが、もっと身近な、人間の複雑で不安定な思考やその発露といったものが混沌の世界の混乱に反映されているように思われるのである。セイタンの邪心や苦悩は、人間ミルトンの脳裏に浮かびあがって描き出されたものであり、そしてまた多くの人間が経験し、味わうものでもある。なぜ人間は、時として邪悪な妄想にふけったりしてしまうのか。また、それにもかかわらず正しく生きたいという欲求はどこから生まれてくるのか。ミルトンがこのようなことを考えて『失樂園』を書いていたかどうかはわからない。しかしミルトンの描く混沌の世界は、そういったことにたいする答えを与えてくれるように思われるのだ。

研究発表②

『失樂園』における預言——新しい世界の創造

川崎 和基

『失樂園』第1巻で、人間の不従順による楽園の喪失という全体の主題が告げられたのち、暗闇の混沌の一角にいる敗北したサタンと墮天使の惨めな姿が登場する。サタンは天を奪回する望みを与えながら、混乱した軍団を鼓舞し、慰める。そして、昔からの預言や天でのうわさにある新しい世界と新しい生き物の創造について語り、さらに、この預言の真偽を確かめ、その対処を決めるため、全体会議開催をほのめかす。

第1巻の“The Argument”にもあるこの一連のくだりにはいくつかの疑問が孕む。まず、サタンが言及する新しい世界と新しい生き物の創造がサタンを含む天使の出現以後になされたのであるとすれば、天地創造の観点から、創造の順序はまず天使で、次に6日間の新しい世界の創造すなわち天地創造となる。なぜ、ここにこのような創造の順序があるのであろうか。また、サタンが預言の真偽を確かめるとあるが、そもそもその預言とは何であらうか。

ミルトンの天地創造観、さらには創造の順序に関しては、これまで様々な議論がなされてきている。天地創造観に関してミルトンは、「無からの創造」(*creatio ex nihilo*)を否定し、「物質からの創造」(*creatio ex materia*)あるいは「神からの創造」(*creatio ex Deo*)を主張する。そしてさらに、御子も被造物の1つであると主張することから、そこにケリー (Maurice Kelley) やバウマン (Michael Mauman) らの批評家は、アリウス主義的主張を見出している。また、創造の順序に関しては、ダニエルソン (Dennis Danielson) のように、3段階の創造を指摘する批評家がいる。

このようにミルトンの天地創造観をめぐる様々な議論がなされてきているが、本発表では、第1巻にある預言を手掛かりとして、『失樂園』における混沌、天使および天地の創造に孕む問題を明らかにし、さらに創造の順序に見られるミルトン独特の天地創造観を探っていきたい。

シンポジウム「ミルトンの言葉（で）」

昨年（2009年）出版された『ミルトンの言葉』（*Milton's Words*）で、アナベル・パタソン（Annabel Patterson）は、しばしば「不自然」と批判される「ミルトンの言葉」の使い方を考察するのに、彼の詩だけでなくその散文にも注目し、そこから既存のものとは異なるミルトン像に迫ろうとしている。このシンポジウムの試みは、パタソンの戦略に刺激を受けつつも、何か物足りなさを感じ、思い切ってその対象領域を「ミルトンの言葉（で）書かれた作品」にまで広げてみることである。

ミルトン死後、18世紀のアレクサンダー・ポープ（Alexander Pope）から20世紀のピーター・アクロイド（Peter Ackroyd）にいたるまで、さまざまな作家たちが「ミルトンの言葉（で）」執筆してきた。まずは各パネリストが時代・作家ごとに「ミルトンの言葉」の使われ方を考察する。そうすることで、ミルトンの言葉の各時代に特有な使われ方、あるいは時代を超えて共通する使われ方を明らかにすることが、本シンポジウム最大の目的である。最終的には、各パネリストの見解を総括しつつ、使われ方の諸相から見えてくる、ミルトンの言葉の使い方を議論できたらと考えている。

オーガナイザー 川島 伸博

シンポジウム①

Milton, Dryden, Pope と ‘chequer’d shade’ 岡 照雄

Pope: *The Dunciad* 第四巻は、混沌と暗闇に向かつての、「ほんの一瞬でよい、鈍い光の一条でもよい、どうか ‘darkness visible’ を恵み給え、」という懇願ではじまる。その薄暗がりのなかで、さまざまな愚者、なかでも三文詩人ら、が活動、暗躍し、巻末では何も見えぬ真の暗闇の支配が確立する。その描写で使われるのが ‘chequer’d shade’ (*The Dunciad*, IV, 125) で、Milton: *L’Allegro*, 95-96 に基づくことは、Pope 注釈で指摘されている。

And you, my Critics! In the chequer’d shade,
Admit new light thro’ holes yourselves have made.

この二行は、銜学的な文献学者が古典テキストに穴を開けて恣意的に改竄すること

を述べるくだりであるが、一般の文芸批評家への Pope の反撥でもある。この箇所について、John Dryden: *Mac Flecknoe* の数行を引用して Milton, Dryden, Pope の関わりを探る。

シンポジウム②

ロマン派詩人たちのミルトン継承

森松 健介

はじめに、ロマン派 (以下 R 派) の時代に至るまでには学童から作家までが *Paradise Lost* (以下 **PL**) に馴染んでいたことに触れ、Milton (以下 **M**) の短詩・散文類もまた R 派に大きく影響したこと、そして R 派は、**M** の人間性、反権力思想、詩歌を一体として崇敬したことを見る (ついでに R 派が **PL** の Satan を英雄的だとして称賛した傾向も一瞥しておく)。また **M** も R 派もともに、革命を挟んだ時代に生きたのであるから、**M** の革命への反応を瞥見したのち、R 派詩人たちの仏革命への態度に両者に共通するものを見る——R 派の、仏革命に対する、イギリス革命への Milton に似た態度としては Godwin (1756-1836) , Blake (1757-1827) , Wordsworth(1770-1850), Hazlitt (1778-1830) , Byron (1788-1824)について、仏革命変質後の、革命後の **M** とは異なつた態度として、再び Blake, Wordsworth について見る。

次いで通常 the Romantics として語られている六人の詩人たちだけではなく、彼らに先立つ Gray(1716-71) , Thomas Warton (1728-90) , Cowper (1731-1800) , Hayley (1745-1820) , 女流詩人 Helen Maria Williams (1762-1827) , 彼らと同時代の Hazlitt, Hunt (1784-1859) , De Quincey (1785-1859) , Mary Shelley (1797-1851)等が **M** を絶賛した姿を引用によって示す。

以上は **M** と R 派についての 5 分程度の概観。本論としては、発表に使える時間が限られているので、次の 2 点に搾って比較的詳しく扱うことにしたい□□① **M** が全人類のあるべき姿を、全宇宙を視野に入れて、抒事詩の中でヘブライの預言者的に歌った姿を (できれば同じ傾向を Wordsworth, Coleridge [1772-1834] , Byron[1788-1824] , P. B. Shelley[1792-1822] にも指摘しつつ) **Blake**:が継承発展させた過程を 11 分程度で纏めたい。Blake は作品 *Milton* を、**M** と同様の預言者的意図を籠めて書いただけではなく、*Milton* をいわば序曲とした作品 *Jerusalem* にもこの **M** 的意図を活用した (*Jerusalem* は発表者の見るところでは難解なので、ご来聴の学部生や若き院生の方を念頭に、老婆[爺]心ながら発表者の理解を handout で示す)。Blake はこの両作品にお

いて人類・国家再興のために詩を書くという **M** 的精神を發揮した。また宗教についても **M** の例に倣って、既成宗教の儀式を排し、個々人の心の中に《イエス＝他者への愛》を具象化した。また Blake の **M** 受容は、単なる模倣ではなく **M** との対話である □□Contraries の対立による弁証法的ジレンマを目指す詩法も受け継いだのである。これは一つには‘L’Allegro’ と ‘Il Penseroso’ の併置から学んだと結果としての Innocence と Experience の対照であるが、**PL** にも見える Contraries の併置、意味の多重性も応用した。また **M** 的な ‘Sublime’ は Blake が誰よりも直接的に受け継いだ。さらには **PL** における Eve の役割と、Blake の Ololon や Jerusalem の役割の類似も見逃せない。

そして②□□ここでは **M** の抒情詩的側面の R 派的受容を扱う。‘L’Allegro’ と ‘Il Penseroso’ が英国自然詩の魁となる様を見、後者の影響が R 派前期の詩人群をも動かして夕方の美しさや夕方に於ける散歩が、いかに重要な詩歌の主題となったかを示し、‘On ...Christ’s Nativity’ や ‘Comus’ でさえ美学的影響力を持ったことを一瞥する。また最終的には Keats (1795-1821) が《沈思・憂愁》を美と化する **M** の伝統を発展させて、いかに高度な美学を生むに至るかを跡づけ、**M** の言葉は美学的にも無視できないことを 9 分程度で力説したい。

シンポジウム③

「汝自身を知れ」：ミルトンの言語認識と自己認識 桂山 康司

ミルトンは言語というものをどのように捉えていたのであろうか—この問いの前に、まず、ミルトン以前にどのような言語観があったのであろうか。第一に思い至るのが、聖書的伝統であり、バベルの塔の逸話はその代表的なものである。本来、人類の言語は一つであったものが、人の神に近づかんとする傲慢に対する罰として、言葉は混乱し、普遍性を失い、ローカルなものになった。ソシュールにより方向づけられた近代言語学的特質は、このローカルな言語的事実の積み重ねに、科学に特徴的な観察という方法論を適用して、個別言語の個別事象を総合、帰納することで、言語法則を発見し、その普遍性に迫らんとするものであった。(ローカルな事実に基づく)客観性重視の姿勢である。それに対するアンチテーゼとして、チョムスキーは、前近代的発想にも基づきながら、より大胆ともいえる、(宗教にとってかわる)科学の絶対性の追求とも考えられる方法を編み出した。個別的事実の裏付けなしに、神が人を創造しそこに神の属性に倣って言語

能力を付与したとされていた宗教的眞実を、人類の言語能力の普遍性に還元して、まるで数学の公理の如く前提し、それに基づいて、言語の普遍文法の構築に乗り出した。いわば、数学的絶対性に基づくかの如き言語研究で、これもまた、科学的方法を言語研究に導入したものであろう。二十世紀は、科学が神にとってかわろうとした時代であると仮定して、科学を神におきかえるなら、ミルトンの立場は、一体どこに位置するのだろうか—ミルトンの言語認識はどちらにより親近性を持つのであろうか。

また、詩が言語芸術であること、詩人 ('poet') が創造者 ('maker') となぞらえられる古代ギリシア以来の文学的伝統に留意しながら、ミルトンが言語芸術としての詩というものをどのように捉えていたのかを、これまた、古代ギリシア以来の自己認識のトポスである「汝自信を知れ」(グノーティ セアウトン) に結びつけて、特に『樂園喪失』の詩句に基づき考察する。事は、言語の問題にとどまらないのである。

なお、時間が許せば、このテーマに沿う形で、特にロマン派詩人はワーズワス、ヴィクトリア朝詩人はホプキンズに例を求めて、詩における言語認識と自己認識との関わりについて、その後の変遷を検討する。

シンポジウム④

恋に落ちないミルトン

川島伸博

森の中で熊に出会ったとしたら、日本では、死んだふりをするのが定番である。欧米にこのようなお約束があるかどうかは寡聞にして知らないが、ピーター・アクロイド (Peter Ackroyd) がその実験的歴史小説『ミルトン、アメリカへ』 (*Milton in America*) で描くミルトンの行動は極めて奇妙である。新天地に漂着したミルトンは、熊と遭遇しても、動じることなく、こう言い放つ。

'Hence, loathed animal,' he shouted, 'of Cerberus and blackest midnight born! Go! Find some cell where brooding darkness spreads his jealous wings. Go, I say!' (65-6)

すると、熊はじっとミルトンをみつめ、両の手を嘗めたかと思うと、ミルトンに背を向け、森の中へ駆けていくのである。ミルトン・ファンならば、思わずほくそ笑んでしまうこの場面は、擬似ミルトン伝におけるミルトンの言葉の使われ方への指針を示してい

る。

本論は、マニング (Manning) に始まり、アクロイドにいたるミルトン擬似伝の系譜を対象とし、そこにおけるミルトンの言葉の使われ方に焦点を当てる。そこから導き出されるミルトン表象のパターンは、愛されはするが、決して恋に落ちることのないミルトン像である。この魅力に欠けるミルトン像の源泉は、確かに彼自身の女嫌いの言説に帰せられるかもしれないが、それだけでは済まされない。『ソネット集』という極めてホモソーシャルな言説の存在にも関わらず、異性と「恋に落ちたシェイクスピア」。このシェイクスピア像が、彼の中心的言説である演劇の言葉に支えられているのと同様に、フィクションとしてのミルトンの肖像画は、その詩における言葉によって彩られている。この観点から逆にミルトンの詩、特に擬似ミルトン伝にしばしば引用／パロディ化される「快活の人」(‘L’Allegro’)と「沈思の人」(‘Il Penseroso’)を読み直すことで、その特異性が見えてくる。